

大きくなあれ・元気に育て
—誕生や飼育・栽培を通して命の大切さを知る—
— 刈谷市立かりがね幼稚園 —

1 実践のねらい

- 小動物の世話や触れ合いを通して、命の大切さに気付かせ、いたわりの気持ちを育てる。
- 栽培を通して、生長や収穫の喜びを味わわせる。
- 誕生会を通して、生まれた時の両親の喜びと命の大切さを知る。

2 実践の内容

(1) 動物触れ合い教室（愛知県動物保護管理センター）

11月5日

犬も自分と同じように生きていることを感じ、いたわりの気持ちをもってほしいと思い、動物触れ合い教室を行なった。触れ合い教室で、子どもたちは「犬との触れ合い」「クイズ」「心音計」「犬とお散歩」の四つのコーナーを体験した。

人も犬も同じ音がしたよ 心音計で犬と自分の心臓の音を聞くコーナーで、事前に獣医さんから「生きているものにはみんな心臓があるんだよ」という話を聞き、実際に犬の心臓の音を聞いて「花火みたい」「はやい！」と興味を示していた。次に自分の心臓の音を聞くと、同じような音が聞こえ「人も犬も同じ音がする」と驚いていた。

なでていいですか？ 犬をなでる時は、飼い主に聞いてからという話を聞き、幼児たちは「いいですか？」と聞いてからなでていた。体をかがめ「フワフワ、柔らかい」「気持ちいい」「あったかいね」と犬や猫の顔をみながらとても優しい手つきでなでていた。

- ・ 5歳児の中には、言葉で“生きる＝心臓が動いている”ということを知っている幼児もいる。しかし、実際に犬と自分の心臓の音を聞いてみて、自分と同じ音がしていることに驚き、心臓がある＝生きている＝命があるということを実感していた。
- ・ 犬をなでる時の幼児の顔は、にこやかで優しさが感じられた。犬や猫をなでたり触れたりしていくうちに「かわいい」「優しくしよう」という気持ちが湧いてくるようで、幼児の表情が穏やかになっていくのを感じた。



犬の心臓の音を聞いたよ

(2) 親子栽培

保護者の協力を得て、4歳児はサツマイモ、5歳児は小玉スイカ・プリンスメロンの栽培に取り組んだ。親子で苗植え・水かけ・草取りなどをしながら育ててきた。

<5歳児 小玉スイカ・プリンスメロン栽培より> 5月～8月

私の家は4人家族だから実は4つ育てる 小玉スイカの雌花がたくさんつき始めた。鉢植えであるため1～2個を育てることを伝えると、A児が「先生、スイカって2つにしないとだめ？」と聞いてきた。理由を聞くと4人家族だから実は4つ収穫したいということだった。小さい実になるが、水やりをこまめにしたり、肥料を定期的にあげたりすればできることを伝えると、A児は4つ育てた。

水あげててよかった B児は、登園すると必ずプリンスメロンの様子を見ていて、水かけは欠かすことがなかった。

7月上旬になると実は大きくなってきたが、木の根元が枯れてきたため、収穫することにした。ハサミでカットするとにおいを嗅ぎながら「よかった、水あげてて」とつぶやいた。

一つをみんなで分けて食べたよ C児は、自分が育てたプリンスメロンを、家族のみんなに食べてもらいたいという思いから、お母さんに5人分に切ってもらったようだ。「先生、おいしかったよ。みんなもおいしいって言ってくれたよ」と、うれしそうに話してくれた。



スイカ大きくなったかな？

- ・長期間をかけて世話をしてきたので、収穫の喜びが増しているのが伝わってきた。スイカやメロンを育てる中で、授粉をどうするか保護者と考えたり、毎日の苗の変化をみながら世話をすることで、幼児に生長するものを大切にすることが育っていることが分かった。

(3) 誕生会 (5歳児)

幼児たちに、大きくなった喜びと自分が愛されて育ったことを感じさせたいと、保護者にメッセージカードの作成をお願いした。カードには誕生時のエピソードや健やかな成長を願う親からのメッセージを書いてもらうようにし、できたカードは他の子や保護者にも見えるように掲示した。

はずかしい! D児は、誕生月になると「先生、お母さんにカードいつ渡す？」と、カード作成の依頼を気にしていた。理由を聞くと、母親がどんなメッセージを書くか楽しみにしているが、掲示されて恥ずかしい気持ちもあるようだった。『小さい時から人にやさしい子でしたね』という母親からのメッセージに「はずかしい!」と言って照れていた。

- ・毎月、誕生会の後にメッセージカードを紹介すると、友達の内容に興味を持つ幼児が増えていった。
- ・幼児にとって、改まった形で両親からあたたかい言葉をかけられたことはとてもうれしいようだ。カードには“大事な子”という保護者の温かいメッセージが込められて、愛されて育ったことを感じる事ができた。



保護者からのメッセージカード

3 おわりに

- ・うさぎやインコを飼って世話をしたり、動物触れ合い教室などを行ったりしていろいろな小動物に触れてきた。小動物に触れながら、教師は、動物にもみんなと同じように命があることが意識できるように働きかけてきた。偶然、インコやハムスターの死を体験したことで、命の尊さを一層感じたと思う。
- ・栽培や小動物の飼育を行いながら、教師は、動植物にもみんなと同じ命があるから大切に世話をすることが意識できるように働きかけてきた。自分たちで世話をするうちに、植物や動物の命を守ろうとする気持ちが育ってきたように思う。
- ・誕生会のメッセージカードで自分が大事にされていたことが分かると、それが土台になって人に優しく接することができるようになって、幼児の姿を見ていて感じる。

4 参考

- ・ブックトーク 「命ってつながってるよ」 名古屋経営短期大学 講師 清水美智子氏

「見て感じる・触れて感じる」—心の体験遊びを通して命を感じる

— 豊田市立山之手こども園 —

1 実践のねらい

「命を大切に作る心」を育むには、子ども自身がかげがえのない存在として生を受けたということが根底にあることが大切であると考えた。幼児にとって「命」を感じさせる方法として触れ合いを取り上げた。親子でのふれあい遊びを通し、保護者が我が子とのかかわりの中で、「愛しさ」を感じ、幼児が「自分は愛されている」「かけがえのない存在である」ということを体感し、親子のきずなやつながりを深めることができると考えた。様々な人と触れ合いを通して、温かさを味わい、親しみを感じ自分や他人のよいところに気づく機会にしたい。また、誕生というまさに生を受けた日を幼児の特別な日として誕生会を保育の中に位置づけ愛されて慈しまれてきたことに気付いたり、成長できた喜びを感じたりする機会になるよう取り組んだ。

《ねらい》

- ・親と子のきずなを深め豊かな心を育てる。
- ・ふれあい遊び（わらべ歌を中心に）を通して、人と触れ合う温かさを感じる。



2 実践の内容

(1) ぼくが作ったミトン人形（5歳児）

自分の誕生月になると職員室に子どもたちが「誕生日なので人形を作りにきました」と自分の人形を作りに来てくれる。自分の好きな色のフェルトを選んで1針1針フェルトを縫っていくが、縫い進めるのは根気の要る作業である。「一つ大きくなったから」と自分の成長を感じることができる取り組みである。「私は」「ぼくは」と眉毛や髪の毛などに自分の思いを込めて一人一人が取り組む。その様子を誕生月がまだこない子が、あこがれで「ぼくも青色にする。この目にしようかな？」と楽しみに待つ姿がある。作りあげたミトン人形を誕生会で披露すると保護者からは「我が子に人形の表情が似ています」「作り上げる根気があったことに驚きました」「誕生月になったら作れると、とても楽しみにしていました」「自分の成長を自分で確認できる人形です」という声が聞かれた。

(2) おかあさんだいすき（4・5歳児）

月1回降園時30分前、わらべ歌を通して親子ふれあい遊びを行ってきた。親子が向き合い、わらべ歌にあわせて触れ合い遊ぶ中で、親は、我が子と向き合う機会になり、子どもは、ゆったりとした時間の中でお母さんとの心地よい触れ合いができた。

保護者の声として「ひざの上に載せるだけで子どものうれしさが伝わり、私自身も楽しくなりました」「一緒に笑顔になれる時間で本当に幸せな時間でした」「普段は子どもとの触れ合いは大切だと思っただけでもあわただしくてできませんでしたが、時間を作っていただき穏やかに子どもと触れ合えました」とうれしい声が聞かれた。



保育者の声としては「どの子も笑顔でお母さんと触れ合い、遊んでいる姿にお母さんの力にはかなわないと思いました」「こんなに喜んでくれるなら親子で楽しめるふれあい遊びの教材研究をもっと工夫し、子ども達を笑顔にしたいと強く感じました」等が聞かれた。また家

でもできるように触れ合いセットを貸し出している。返却時に「子どもが、教えてくれ家族で楽しみました」と聞くことができた。

わらべ歌に合わせて触れ合い、親子がゆったりした安定した気持ちで向き合い、同じ遊びを一緒にする経験は、我が子への愛しさを、子どもは、愛されている実感を味わう機会になった。

(3) 赤ちゃんとお遊んだよ (5歳児)

支援センターに来所するお母さんに抱かれた赤ちゃんをみて子ども達は、可愛さに吸い込まれるように自然と笑顔になる。そんな子どもの姿を見て、「触っていいよ」とお母さんに言われるとそっと頭や手足をなでる。部屋に戻ると「手を触ったら私の手をギュと握ってくれて嬉しくなった」「私が、にこっと笑ったら赤ちゃんも笑ってくれた」「抱っこしたら、柔らかかったけど重かった」「赤ちゃんがほしくなった」「じっとぼくを見て、話してくるみたいだった」と感動を聞かせてくれた。



「赤ちゃんの頭は柔らかかった」という感動を聞いたA児が「赤ちゃんの頭にハートの形があるから優しく触らないといけないって」と教えてくれた。A児は、妹が生まれた体験がある。そこからお母さんと赤ちゃんは、おへそでつながっていた話になり、親子のきずなを感じる機会になった。

赤ちゃんを慈しむお母さんのまなざしやお母さんに安心して身をゆだねている赤ちゃんをみて、自分のお母さんを思い浮かべたようだ。「赤ちゃんの時、私も抱っこしてくれたよね」「俺のお母さん怒るもんな」とつぶやいたB君。「きっとB君に、いろいろなことをもっと覚えてほしいからだと思うよ。」と話すと、納得したようにうなずいていた。

(4) おじいちゃんがほめてくれた

地域の老人クラブの方や在園児の祖父母方を招いたふれあい発表会では、保護者とは違った雰囲気会場を包み、笑い声と惜しめない拍手で発表は終わった。終了後、「よく来てくださいました」「最後まで見てくれてありがとうございます」と嬉しさから子ども達がお礼の言葉を自分で考え、お土産を配る姿が見られびっくりした。お土産を受け取りながら握手や頭をなでてもらったり「大きな声で言えた」と誉められたり、触れてもらったりしたことが、人との深まりとなった。このようなかかわりの姿に保育者も心が温かくなった。

3 おわりに

- 子どもにとってミトン人形作りは1針1針縫い作り上げる過程が成長した実感を味わう機会になり、保護者には我が子の成長を目で見て、実感する機会になった。また出来上がった人形を介して親子の会話も増え、親子で成長を確認する機会になった。
- わらべ歌の持つリズムの穏やかさが保護者をゆったりとした心もちにさせた。保護者は子どもに穏やかな心でかかわりがもてたことで「愛しさ」を感じ、子どもは「愛されている」体感もて、親子のきずなや、つながりを深めることができた。
- 様々な人と触れ合いを通して、命の大切さや感動する心を感じる事ができた。

4 参考

桜花学園大学名誉教授	小西由利子氏
わらべ歌講師	山川祐子氏
助産師	安藤亜理佐氏
元保育士	加藤弥千代氏

おじいちゃん おばあちゃんって すごいね 交流を通して揺れる心

— 安城市立さくら保育園 —

1 実践のねらい

- 保育園に併設する福祉センターにみえる地域のお年寄りとの触れ合い体験を通し、世代の異なる人のゆったりしたしぐさや優しさを感じたり、楽しさや嬉しさを共感したりすることで、互いの存在の大切さを知らせる。
- 小動物の飼育を通しての生き物の誕生や死、朝顔の種まきから種取までの世話を通しての植物の成長や異変等を間近に見ることで、どれも「命」を持って生きていることを感じる。

2 実践の内容

(1) お年寄りとの交流

- 園庭の畑に夏野菜（トマト・ナス・ピーマン・サツマイモ）の苗を一緒に植える。小さな野菜の苗を大事に扱うことや、添え木を立てる意味を教えてもらい、慣れない手つきであったが、お年寄りの豊かな経験に助けてもらいながら植えるようにした。枯らさないように世話をし、実をつけることに期待が膨らんだ。



【植え方のお話を聞こう】

- 収穫した野菜を使って「餃子ピザ」を作る。自己紹介をした後、子どもたちと一緒に材料を切ったり炒めたりトッピングをし、出来上がりまでのわくわく感を共有した。手早く材料を切るおばあちゃんの手元に見入り、「私のお母さんも上手だよ。」と話しかけたり、トッピングの仕方を教え合ったりするなど、自然に打ち解けていく姿があった。82歳のおばあさんは「はじめてよばれた。おいしかったよ。」と、そして、「ありがとうね。」と参加のお年寄りから感謝される喜びを味わえた。
- 敬老の日に合わせ、福祉センターのエントランスホールにて「おじいちゃんおばあちゃんとの楽しい集い」を開催した。保育の中で実践している手遊びの中から、肩たたきや握手など肌との触れ合いが行える内容を主にした。



- こま回し名人の来園は、こまに興味を持ち始めていた年長児の心を特に大きく揺さぶった。名人のように回せるようになりたい、回せることを見てもらいたい、という思いは、他の伝承遊び（あやとり・お手玉・けん玉など）でも福祉センターのお年寄りと一緒に遊びたいという思いにつながった。
- こま・あやとり・お手玉・けん玉・オセロなどを持って福祉センターへ遊びの出前を行った。「昔はうまいこと回せたんだがなあ。」「子どものころは三つでもやれたけど、やあっとやってないでね…。」と昔を回想しながら子どもたちの誘いに乗り、こま回しやお手玉を見事に披露されるお年寄り。「しわしわの手なのに、お手玉が上手！」「上手になったね。うまいうまい。」とあちこちで互いのすごさを認め合う声が聞かれた。お年寄りとのゆったりした時間の共有は、子どもたちの心を温かくし、もっと一緒にいたいという思いを育んだ。



(2) 生き物の「命」を感じる

- 園外保育の際、園の近くの田んぼでザリガニやカエルの卵を捕り、年長児が飼育を始めた。登園した子が「おたまじゃくしのあかちゃんが生まれた！」と、誕生を大発見し保育園中に報告。成長の様子と共に、死んだり元気がなかったりする小動物への気付きを大切にし、子どもたちと「小さな命」を考えるきっかけとなった。

3 おわりに

- 人間関係の基礎を培う乳幼児期には、何よりもまず、自分自身が愛され、認められる経験や実感が重要である。その上に、身近な人と親しみ、関わりを深めることにより、他への愛情や信頼感を持つようになっていくと考える。福祉センターが併設という園の恵まれた環境を生かし、少人数での交流であるがゆえに子どもの心を揺さぶり、人と関わることの楽しさを実感できたように思う。今後も、福祉センターの協力を得ながら互いの存在の大切さを知らせていきたい。また、生き物の飼育や草花の栽培を通しては、子どもたちが直接関わる機会を大切にし、成長する過程と共に様々な負の出来事からも目をそらさず、子どもの気付きをしっかり受け止める保育に心がけるようにしたい。

命を大切にすることをはぐくむ

～ 動植物や人とのかかわりを通して ～

— 西尾市立三和保育園 —

1 実践のねらい

- 身近な動植物に親しみ、関心や愛情を持って接することで、すべてのものに命があることを知らせ、いたわりや思いやりの気持ちを育てる。
- 親子の触れ合いや地域の人との触れ合いの場を通して、人との触れ合いを楽しみ、喜びや自分が愛されていることを感じるようにする。

2 実践の内容

(1) 動物と触れ合ってワクワクしたよ

○ カブトムシ、ハムスター、ツバメ、ウサギ

- ・ カブトムシの幼虫をたくさんもらい飼育した。3歳児は初めて見る子が多く、「気持ち悪い」と言う子もいたが、成虫になると「カブトだ!」と大喜びで、目を丸くして見入っていた。成虫になれなかったさなぎを見て「どうしたの?」「何で動かん?」と言っていたが、「死」に直面し、死んでしまうと元に戻らないという命の重みを実感できた。
- ・ ハムスターは当初から「かわいい」と親しみを感じ、歓迎パーティーをしたりハムスターのために迷路を作ったりして、友達感覚で触れ合いを楽しんだ。ゲージの掃除も保育士が行う様子を見ることで、徐々に自分たちで掃除をするようになった。『『ギーッ』』っていうのは怒っているからだよ。やさしくしなくちゃだめだよ」「抱く時の手は、水をすくうようにするといいよ」と言い、ハムスターの気持ちに寄り添い関わる姿が見られ、優しい気持ちが育ってきた。
- ・ テラスではツバメの成長を観察する機会を得た。休みなく土を運び巣作りしたり、一生懸命親ツバメがえさを与えたりする姿を見て、「お腹の空いているヒナがわかるのかな?」「お父さんお母さんは偉いな!」と、自分たちに置き換えて感じることができた。巣立ちの時、ヒナの成長に喜びを感じ「頑張っ
てね!」「またきてねー」と声援を送り、別れを告げる子ども達の姿に「命の誕生」のすばらしさが伝わったと感じた。



- ・ 子ども達が名付けた2羽のウサギ「ミミちゃん」「ベリーちゃん」。ウサギを抱いたり撫でたりして温かさに触れ、「命あるものは温かく、動物にも皆と同じ命があり、やさしくされると嬉しいんだ」ということを、触れ合いを通して気づくことができた。



(2) 植物を育てたり、食べたりして命のつながりに気づいたよ

○ 夏野菜（キュウリ、ミニトマト、ピーマン、ナス、オクラ） アサガオ、サツマイモ

- 夏野菜の栽培は、毎日水やりや草取りをしながら、花が咲き小さな実をつけ生長していく姿を目の当たりにして、野菜にも自分たちと同じように命があることを知った。収穫できた野菜を各クラスに見せて回り、収穫の喜びをみんなで共有してその日のうちに調理して食べた。野菜の命を食べることで自分たちも命をつないでいけることを話すと、野菜の苦手な子も「いただきます」と食べたり、食器の中を探したりして、食べ物への関心や感謝の気持ちが生まれてきた。



- サツマイモは5歳児親子で苗を挿し栽培をした。秋にはボランティアのお母さんたちと一緒にサツマイモをアルミホイルで包み焼き芋会をした。おやつタイムに親子で焼き芋を食べ、「おいしさ」だけでなく、食べられることのありがたさ、命をつないでいくことの大切さを感じ取った。
- 前年度の年長児が採取した種を蒔き育てたアサガオ。見事にアサガオが咲いた後に枯れかけた花を見つけ、種が出来る事に気づく子もいた。話し合いの場では、花が咲き再び種になったことを確認すると「つながってるんだね」と、命が受けつがれていくことに気づいた。

(3) おじいちゃん、おばあちゃんの手あたたかかったよ

○ もちのき交流

- 4, 5歳児はクラスごとにデイサービスのお年寄りを訪問した。歌や器楽遊びの発表、手遊びや肩たたきなどの触れ合いを通し、感謝の言葉や「上手だね」「かわいいね」と喜んでくださるお年寄りの姿を見て、「喜んでくれて、うれしかったよ」という声が聞かれた。人に喜んでもらえる嬉しさ、人の手のぬくもりの温かさを実感し、「人との出会い」「命の出会い」のすばらしさを子どもに伝えることができた。



3 おわりに

- 飼育や栽培を通し、触り方や飼い方、死の悲しみ等体験をする中で「命の尊さ」を学ぶことができた。その経験が友達に対する思いやりにつながり、友達を大切にする気持ちが育つのではないかと思う。
- お年寄りとのふれあいから人の温もりを感じ、子ども自身が喜びや大事にされていることを感じとることができた。
- なによりも保育士自身が意識を持ち、実体験の中で「命の大切さ」が伝えられ、感じられるようにしていくことが大切であると思った。
- 地域に「いきいき通信」を配布し園の取り組みを知ってもらったことで、活動への協力を得たり、地域をあげて命の大切さについて考えるきっかけとなった。

豊かな愛情で育つ「自分を大切にする心」

— 蒲郡市立南部保育園 —

1 実践のねらい

- 親子の触れ合いの中で愛されていることに喜びを感じ、自分を大切にする気持ちをもつ
- 障がいのある子との混合保育や他施設との交流の中で、いろいろな個性を認め合い、思いやりの気持ちを育む。

2 実践内容

(1) 親の愛情に気づく活動（保育参加・夏祭り・運動会等）

- 保育参加は6月～7月、10月～11月、1月～2月の期間の都合の良い日に、親が半日保育士になって、子ども達と生活を共にしたり一緒に遊んだりしてもらおう。期間設定が長かったので参加に無理がなく、父親の参加も多かった。

いつもは仕事に忙しいお父さんも今日は子ども達と一緒に絵描き。「パパは私のことが大好きだった！」H子ちゃんは嬉しそう。



- 夏祭りや運動会等の行事で、親子が触れ合う競技や内容を多く取り入れ一緒に楽しむ。運動会では子ども達が育てたふうせんかずらの種をつけて風船を飛ばした。埼玉県まで届いて「大事に育てます」との返事をもらえたことは大きな喜びになった。



当日は風もなく、様々な色の風船が空高く舞い上がりとてもきれい！人も植物も命は皆同じ。「この命もつながりますように・・・」との祈りを込めて見守った。

(2) 思いやりの気持ちを育む活動（他の施設との交流・人形劇や講話）

- 他の施設（児童館・赤ちゃんサロン・母子通園施設）の子ども達との交流は、少人数のグループで、手遊び・歌等を紹介しながら個々がゆったりとかかわった。



「僕が絵本を読んであげるね。」
「赤ちゃんって、これ分かる？」
と、お母さんに聞く子もいた。
また、兄弟のいない子は赤ちゃん
を前に戸惑う姿もみられた。

- おやつパンを作ってくれる人達（障がい者）とそれを支えている人達の話は、質問形式で、画像もあり分かりやすかった。和気あいあいの雰囲気の中で聞くことが出来、自分達のために一生懸命作ってくれている気持ちに気づくことができた。パンは年長児が切り分け、いろいろな種類のパンを親子で試食した。



3 おわりに

- 様々な行事で親子が触れ合って楽しく遊ぶ中で、子ども達は心が満たされ、両親の愛情を感じることができた。大切にされている自分、両親にとってかけがいのない自分（命）であることに気づけたと思う。また、「自分に似ているわが子が、より愛しくなった」「友だちとたくましく遊ぶ姿が嬉しかった」「年齢による子どもの育ちがわかり、子どもってすごいなあと思った」「先生の姿から子どもへの接し方がわかり、家でもがんばろうと思う」等の声が届き、子育ての喜びや我が子をかけがえのない存在として実感できたのではないかと思う。今後も継続したい。
- 様々な施設との交流や講話等を通し思いやりが深まった。障がいがあっても社会のためにがんばっていることや皆が思いやりをもって支え合うことの大切さに気づいた。皆で支え合う過ごしやすい街にすることが命を大切に作る心につながると思う。

子ども未来園は 笑顔でいっぱい！！

— 犬山市立羽黒北子ども未来園 —

1 実践のねらい

- 園生活の中で、親子のふれあいを通して、きずな、つながりを深める。異年齢を通じて、思いやりやいたわりの心を育てる。
- 年間行事として地域の高齢者とデイサービス利用者に関わる活動を計画し、高齢者に対する愛情と思いやりの心を育てる。

2 実践の内容

(1) 親子ふれあいコンサート (平成20年10月31日金曜日 午後3時～午後4時)

- シンガーソングライターでプロ歌手として活躍している方を講師に招き、子育て体験の講話を含めたコンサートを開催する。参加人数は園児96人、保護者60人だった。
- 事前に親子ふれあいコンサートを開催することを便りで知らせ、期日が近づいた頃に手作りポスターを掲示し、保護者に関心を持ってもらう。
- 当日、子育てに関する講話を含めたコンサートに参加することで、保護者にゆとりある時間を過ごしてもらうとともに、子どもに愛情をそそいでいくことの大切さを感じてもらう。また、子どもと一緒に歌を共感することで、子どもと会話をするきっかけになったり、子どもの成長を感じてもらったりする。
保護者からは「話を聞いて忙しさにかまけて、怒ってばかりいる自分を反省し、明日から頑張ろうという気持ちになった。」、「子どもにゆったりとした気持ちで接したい。」、「コンサートで歌ったどんぐりの歌を家に帰ってから、子どもと一緒に歌うことができて心が温かくなった。」との感想があった。

(2) 保育参観 (年2回 各クラス 午前9時45分～午前11時)

平成20年6月3日(火) 平成21年1月20日(火)

- 保育参観を参加型にし、園生活で子どもが日ごろ楽しんでいるゲームや製作を親子で一緒に取り組んでもらう。
- 年間行事計画を4月に配布する。毎月園だよりを発行し、知らせる。期日が近づく頃に保育参観だよりを発行し、各クラスの取り組み内容を知らせる。



- ・保護者からは、「以前の保育参観は見るだけだったが、今年の保育参観は親子で話しながらかつて作ることができ良かった。」「子どもの思いを聞いて手伝うことが、大事だということが分かった。」という感想があった。

(3) 異年齢での関わり

- 5歳児と0歳児の交流を平成20年7月と12月に行う。
 - ・5歳児が7月に0歳児クラスを訪れ、保育士が子どもにミルクを飲ませるところを見たり、実際に5ヵ月児にミルクを飲ませたりする。Yちゃんは、「あかちゃんの手、私よりちいちゃかったよ。」と話していた。
 - ・平成21年1月頃から土曜保育で、1歳2ヵ月に成長した0歳児クラスの子をひざにのせたり、着替えを手伝ってあげたりする姿が見られた。
- 異年齢の交流を平成20年6月上旬から平成21年1月下旬まで行う。
 - ・3歳児から5歳児クラスを3つの小グループにする。5歳児が給食当番を行い、机を拭いたりおかずを盛りつけたりする。



(4) 地域の高齢者との交流

- 地域の高齢者との交流（毎月 第3金曜日）
 - ・園の行事として、「なかよし会」という名称で行い、年度始めに行われる地域の総会に参加して趣旨を説明し、年間計画を配布する。
 - ・わらべうた遊びや絵本の読み聞かせなど年齢に合った活動内容と運動会やどんど焼きなどの活動を行い、全園児と交流をする。
- 近隣のデイサービス施設を訪問（年2回 5歳児 午前10時から午前11時）
 - ・平成20年10月14日（火）と平成20年12月9日（火）に実施する。遊戯や歌を披露したり、ふれあい遊びをしたりする。施設職員からは、「子どもの力って、すごいですね。」「リハビリで、手も動かなかつたおばあちゃんの手が動いて、びっくりです。」と感想があり、子どもは、「おばあちゃんの手、あつたかかった。」と話していた。



3 おわりに

- 命の取り組みを行って、毎年行っている行事を見直すことができた。毎年行っている今年も行うという考えではなく、何を大切に考えて行事を行うのかという視点で話し合いを持つことが大事であることが分かった。命の教育の原点は愛情であると言われることから、今後も、日常保育の中で行っていることが、命を大切にする心を育む活動につながっていることを忘れずに、保護者とともに子育てを行っていきたい。

人や自然を通して感謝する気持ちや愛情を受ける喜びを感じる

— 常滑市立三和西保育園 —

1 実践のねらい

- 家族や地域の人たちと触れ合う中で愛情を受ける喜びを感じたり、感謝の気持ちをもったりして思いやりの心を育んでいく。
- 身近な動植物を遊びに取り入れて、興味・関心を深めたり、飼育・栽培を通して、親しみをもったりしながら、様々な体験を通して生命の大切さが感じられるようにする。

2 実践の内容

(1) 野菜や花の栽培・収穫や園内の自然との触れ合い

エピソード 「僕のトマト、おいしいのかな…」 4歳児

<5月> 地域の方に教えてもらいながら、野菜の苗を植える
(トマト・キュウリ・ナス・ホウズキ・サツマイモ等)

A 児 「どうやって植えるのかな…?」

おばあちゃん 「苗をおいたら、優しく土をかぶせてね」

A 児 「わかったよ。おばあちゃんありがとう」

<7月> 水かけをしながら、生長を楽しみにする

C 児 「水をかけると、元気になるよね」

保育者 「みんなが水をかけると、トマトがもっと
美味しくなるって」

C 児 「おいしくなあれ」「おいしくなあれ」

<8月> 収穫する

S 児 「ピカピカの野菜だ!」「ううん、いいにおい」
「でも… 僕、トマトいらない」

保育者 「おいしくなあれって水かけした
トマトだから絶対おいしいと思う
けど…」 「少し食べてみたら?」

S 児 「おいしい!」

僕…
トマト嫌い

大きくなあれ



あっ! トマトが赤くなった



- ・水をかけないと、苗がしおれてしまうことに気づき、水かけの大切さがわかった。
- ・水かけをしながら、生長する様子から収穫を楽しみにする気持ちが高まった。
- ・嫌いなトマトでも、自分で育てたから『食べてみよう』と気持ちが変わり、勇気を出して食べてみたら『おいしい』と感ずることができた。

《 他の栽培 ・ 植え付け 》

10月 大根、水菜、人参の種子まき (5歳児)

サツマイモを収穫し、食べる (全園児)

ソラ豆、スナックエンドウ、キヌサヤエンドウの豆まき (4歳児)

パンジー、チューリップの植え付け (4歳児)

1月 大根、水菜を収穫し食べる (全園児)

2月 ジャガイモ の植え付け (4歳児)

青組になったら食べられるね

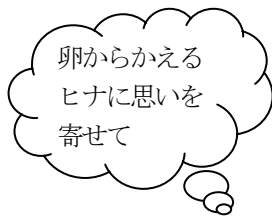
何色が
咲くのかな?

砂場の上の藤棚で、枝にうずくまっているハトを見つけると、子どもたちは集まってハトの姿を覗き込むように探した。しかし、動きがなく「ずっとにげていかないよなあ…」と不思議そうに眺めていた。こんなに近くで話をしても逃げていかないのは、卵を温めているのかもしれないね」と保育士が話しかけると、じっと見ていたA児が「揺らすな!」「ハトがいるんだから」と言った。卵を見なくなったB児が、高くて見えないので、台を使おうとすると「そっと持って来るんだぞ」とA児が声をかけた。B児とC児と一緒に台の上で「どこにある?」と話す声に「静かにしないとだめだよ」とA児がささやくように言った。

A児とB児が台の上から砂場に来る数人の年少児に「今日の砂場は中止だ。ハトがいるから」と言うので「あれ!今日の砂場は中止なの?」と保育士が聞くと「ここでみんなが来ないように見ているの」と答えた。ハトを思いやる言葉であると受け止めたので「ハトが卵を守っているようにみんながハトを守っているのね」と保育士は認めた。

ヒナを見つけたある日 「あっ!ヒナがいるぞ」 「本当にいるぞ」

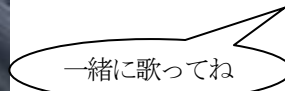
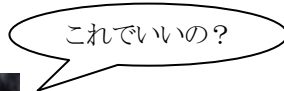
11月に入ったある日 「あれ…?ヒナもハトもいなくなっているぞ」



- *ハトが卵を温めていることがわかったと「生きている」命を感じ取りハトが愛おしくなったのではないかな。
- *『見て確かめてみたい』という好奇心をもちながら、ヒナの誕生を楽しみにしていたのではないかな。
- *卵からヒナが生まれることを子どもたちは、絵本や他の生き物で知っているのだから、卵を大切に思えるのだと思う。

(2) 地域の高齢者の方との交流

—6月26日—



—1月22日—



- *おばあちゃんにわからない字を教えてくださいながら短冊に願い事を書いた。
- *おばあちゃんたちにピアノを聞いてもらったり“雪”の歌と一緒に歌った。
- ※子どもたちは、おばあちゃんがいろいろなことを知っていることで「すごいなあ」と感心したり、おばあちゃんたちと一緒に歌ったことで親しみが湧いた。

(3) その他の取り組み

- ☆ 絵本の読み聞かせ 「ともだちや」 8月22日
- ☆ 移動動物園来園 11月18日
- ☆ 命を育む講演 「愛する子どもの命」 — 保護者・保育者向け — 2月4日

3 おわりに

- 野菜の栽培を通して、世話をしながら生長・収穫の喜びを味わったり、地域の方と触れ合って想いをかけてもらい、愛情を感じたりして自然や地域の人に親しみが深まった。
- 大切に世話をした野菜が、枯れて悲しい気持ちを味わった子どもに、この経験を踏まえて生きていることの大切さを感じさせていく必要性に気づいた。
- 保育者がこれまで見落としがちな自然や子どもの声に意味を見だし、関わる機会が増えた。

野菜作りを通して、「食の大切さ」「生きることの尊さ」を学ぶ

— 江南市立布袋東保育園 —

1 実践のねらい

- 野菜などの栽培や収穫を通して、食べ物大切さや命の尊さを思う心を育てる。
- 野菜を自分達または、大人と一緒に作ることで野菜に関心を持ち、「育てる」「食べる」ことが命につながることを知らせていく。
- 食べ物を大切にすることを育てる。

2 実践の内容

(1) 子ども達の手で野菜を育て、収穫する年間計画を立てる

月	活 動	保育士の配慮及び援助
5月 6月	<ul style="list-style-type: none"> ・畑づくり ・苗を植えたり、種を蒔く きゅうり、なす、トマト、ピーマン、落花生、枝豆 ・野菜の世話を する (みずやり、草引き) 	<ul style="list-style-type: none"> ・苗の名前は、子ども達に知らせないようにする。 ・子ども達の「何だろうな〜?」「何ができるのだろうな?」という、興味関心を高め自分達で作る楽しさを味わわせる。 ・野菜の世話を する 中で、発見や驚きを共感し、つぶやきを受け止めて記録する。
7月 8月	<ul style="list-style-type: none"> ・枝豆を収穫しおやつに食べる。 ミニトマト、きゅうり、ピーマン、なす、おくら、給食で食べる。 ゴーヤは、給食おやつで食べる ・収穫した野菜を家庭に持ち帰る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見て、触れて収穫の喜びを共感する。 ・栽培した野菜を食べるとおいしいという喜びを保育士や友だちと共感する。 ・保育園で取れた野菜を家庭に提供し、野菜の話題や、おいしい野菜の食べ方などについて情報交換する。
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・落花生の絵本を見たり収穫をして食べる 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本を見て落花生と気付いて苗の様子を観察し、保育士も子どもの発見を共感する。 ・収穫した落花生を茹でて食べる。
10月 12月	<ul style="list-style-type: none"> ・秋野菜の苗を植えたり、種を蒔く ・大根、ほうれん草、じゃが芋、苺、スナックえんどう (苺、スナックえんどう豆は4月5月以降に収穫する予定) 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食の献立の中にどんな食材が入っているか?どんなエネルギーになるか?興味を持って分類表を見られるように貼っておく。保育士や友だちと話をしたり、気付いたことを受け止める。

(2) 年間計画について観察したり、大人に聞いたりして関心を深める

- [実践1] トマトの挿し木について
- 園児A「先生、このトマト枯れてるよ?もうだめかな?」
保育士「そうだね。枯れてしまってるからできないかもね?」
- 園児A「おばあちゃんに、聞いてくる」
- 次の日 園児A「先生、これはここから切って切った枝を植えておくと、元気なトマトが出てくるって、おばあちゃんに教えてもらったよ。挿し木っていうんだって。おばあちゃんに聞いてきたもん。」



1週間後 園児 A「よかったね。元気になって。おばあちゃんってすごいね。トマトを元気にしてくれたよ。」

〔実践2〕落花生の収穫について

(落花生についての絵本をみてから収穫をした)

園児B「わあー、葉っぱがいっぱい」

園児C「わあー、ヒゲがあるよ。絵本でみた通りだ。」

園児B「そうだったね。これが、ヒゲだ。」

園児C「この下にあるんだね？落花生が」



(3日後収穫時にて)

園児C「ぬくぞー！！やった。ぬけた。わーい小せーなー。」

園児B「僕も抜こう。わあー、これは大きいのだ。先生、これどうやって食べる？」

保育士「塩茹でにしようか。落花生の取りたては塩茹でにするとおいしいんだって。先生、お祖母ちゃんに聞いたよ。」

園児達「へー、聞いたことない。塩茹で食べたことないよー」

※ 会食中の会話より

「先生、こんなの初めて食べる」「固いのしか食べたことない。」「おいしい」「やわらかい」と、様々な反応あり。今までは、市販の煎った殻つきの落花生かピーナッツしか食べたことしかなかった子がほとんどだったが、自分達の目の前で、茹でて食べることで、発見したことがあった。また、家庭で、試食した話をしたようで、次の日保護者より、「私もそんな食べ方は知らなかったので祖母に聞いたんです。」等との反応が多く聞かされ、子ども達が興味を持ったことで、保護者も一緒に「食」について関心が持てたようだ。

※ 3歳児のままごと遊びより、命の大切さを感じる。



11月頃より、ままごと遊びに変化があり、「お料理作り」を楽しんだり、料理名を言ったり、何の野菜を使って作る等と話をしながら料理作りをままごとで楽しむようになってきた。「これは、煮て食べるとおいしいよ。」とか、「これは血や肉になるんだって」とか「ゴーヤチップを作ろうね」とか、自分が食べた物や料理方法をままごとの中で表している。その中で、子ども達なりに「命」につながっていることを感じたり、知りつつある。

人形を抱っこし、何かを食べさせたり、寝かせつけたり、おんぶをしたりして遊ぶことが増えてきてその中で、「いっぱい食べて大きくなってね」「はい、保育園でできたお芋だよ。おいしいね」等と話かけて遊ぶ姿をよく見かけるようになった。



※このような遊びの中からも、子ども達なりに「食」と「命」との関係を知り、命の大切さ、「命の尊さ」を感じたり、知りつつあることがわかる。

3 おわりに

子供達と一緒に野菜作りをして、園児も職員も本当に今まで知らなかったことを「知る」「発見」「不思議」ということに出会い、感動することが多かった。そして、何より、楽しく野菜作りをし、食する嬉しさを味わうことができた。その影には、常に保護者の方々、その御家族の方々、地域の方々、やさしく手伝ってくださり、園児共々感謝の気持ちや喜びを実感した。「食」を通していろいろな体験をして、命の大切さを実感することができた。

体も心もおおきくなあれ！ ～世話や収穫を通して感じよう命～

— 小牧市立篠岡保育園 —

1 実践のねらい

- 米作りや身近な動植物との関わりを通し、自分の命も共に成長していることを感じ、みんなと一緒に命を大切にしようとする心を育てる。
- 命に関する話を保健師から聞いたり、老人福祉施設訪問を通し、生きることの尊さや命のつながりを感じる。

2 実践の内容

(1) 米作り

- 5月 田植え「どろどろで田んぼみたい」
種籾選びから始まり、芽が出るまで毎日水替えをした。ペットボトルや発泡スチロールの箱などを田んぼにして苗を植える。毎日のように水の様子を気かけたり、稲の育ちの変化を絵に表したりした。
- 6月 苗の観察「うまく育たない だめだ・・・」
田植えをした。苗が育たない・・・。雨の後など水が多すぎるのがいけないのではと、水をかきだす姿も見られたが苗は伸びなかった。期待したことがうまくいかずがっかりしていた。お百姓さんから新たに苗をわけてもらい「こんどこそうまくいきますように」とやり直す。
- 9月 かかし作り「稲をすずめから守るのは強いものにしよう！」
クラス皆で話し合いティラノサウルスやドラキュラのかかしを作った。
- 10月 稲刈り・脱穀・粃すり
「ふくらんでいて固いのがはいつているよ」
ハサミで稲をかり、割り箸で挟んで脱穀、すり鉢に野球のボールでこすって粃すりを行う。米のひと粒一粒を喜んで見せ合っていた。半年かかって育てた稲だが収穫できた米はほんのわずか、米作りの大変さと難しさを実感した。
- 11月 収穫祭「みんなが水をあげたから、“ありがとう” ってお米ができた」
子ども達の経験も年長から年中へとつながって欲しいと願い、異年齢児にも米作りの取り組みを伝える。収穫に感謝し、年長児が協同で力を出し合い作った神輿をかついで練り歩いた。保護者（保育参観）と共に、親子で収穫した米を入れたおにぎりを作り味わった。具の梅干は、近所の方の好意で梅をちぎらせて頂き、年長児でしそもみを行い漬けたものなので、忘れられない味となった。



(2) 保健師より命の話を聞く (10月22日)

自己肯定感を育むために (ぼくは、わたしは世界でたったひとつの大切な花)

- 赤ちゃんが生まれる時の話しを聞く。お母さんが持っている命のモトと、お父さんが持っている命のタネが出会った時の大きさは針の穴くらいであったこと。赤ちゃんが生まれることでまわりのみんなを幸せな気持ちにしたこと、そして何よりも赤ちゃんは (みんなは) 自分の力で生まれてきたという話を聞く。子ども達は、赤ちゃんは逆さに入っていて“へその緒”でお母さんから栄養をもらいおしっこを出すことに驚いていた。お母さんのお腹の中にいた時の記憶を尋ねると、「あたたかだった」「くるくる回って生まれてきたよ」と、でんぐりかえしをして見せてくれる子もいた。
- 赤ちゃん抱っこ体験では、実際の赤ちゃんの重さ、背丈で作られた人形を抱かせてもらい、扱い方も自然とやさしく慎重な手つきになっていた。赤ちゃんの重みを体で感じ、表情もにっこりと穏やかであった。
- 大型紙芝居“うまれてきてくれてありがとう”
赤ちゃんが産まれてくる時の待ち望む家族の様子や、お腹から出てくる様子を実際の赤ちゃんの心臓音を聞きながら紙芝居で見た。感動し涙を浮かべる子もいた。
- アンケート用紙を家庭に持ち帰り、自分の子が生まれた時の事や、妊娠出産を通してお母さんの感じた気持ちを子ども達に伝えていただいた。嬉しかったこと、辛かったこといろいろあったけどあなたのことが大好きだよ！という親の気持ちを、言葉や態度に出して伝えてもらい、親も子も大切な存在だということを互いに感じる事ができた。



3 おわりに

- 命の取り組みを通し、子ども達は体験の中で育つという事を再確認した。移動動物園で、動物達に触れることで温かみを感じ、聴診器でドクドクという心臓の音に感動。老人施設訪問では『手が動かないからあやとりやお手玉、踊りをみせてあげた』『耳が遠いから大きな声で話してあげた』など、実際に接し触れ合う中でお年寄りの事を自分なりに感じ考えて接し、相手を思って何かをしてあげることの喜びを感じることができた。このような人に対する思いやりの気持ちは沢山の体験の積み重ねの中で育っていくものである。
- 自然環境や人とのかわりが希薄になってきた今日である。今後も、命の尊さや、大切にしようとする心の根っこを育てていくために、子ども達が様々な体験の中で見たり、触れたり、感動することの喜びを友達と共に共有できる場を保育者自身が意識して作りだすよう実践していきたい。



小さな命との出会い、未来に輝く命を育む

— 稲沢市立長岡保育園 —

1 実践のねらい

- 花や野菜の世話を通して子どもの発見や感動を受け止め、植物を育てることに喜びを持つ。
- 小動物に興味関心を持つと共に、飼育を通して命の大切さを知る。
- 園児の祖父母、地域の老人との交流を通して、思いやりやいたわりの気持ちを育てる。

2 実践の内容

(1) 野菜栽培・調理

- 園庭の花壇や地域の方の協力で畑や田んぼを借り、夏野菜（プチトマト、スイカ、かぼちゃ、とうもろこし、きゅうり、ナス、ピーマン）やさつまいもの苗植え、田植をした。水まきや草取りなどの世話を保育士と一緒にし、どんな作物ができるか期待しながら生長を見守るようにした。草が生えていると「野菜大きくならんよ」虫がいると、「食べられちゃうからとらないかんよ」と言う子もいた。収穫した夏野菜や米などは、園で調理して食べたり家庭に持ち帰り、調理してもらった。



- さつまいもを育て、さつまいもの蒸しパンづくりをした。全園児が調理に携わる経験をするために、年少児は「洗う」年中児は「皮をむく」年長児は「材料を切り、粉と混ぜ合わせアルミホイルに流し込む」の作業を年齢ごとに分担した。みんなで調理してみんなで食べる喜びを味わい、「おいしい」「おかわりちょうだい」という子も多かった。

- 年長児は、自分たちで植えて育てた秋じゃがを収穫して、カレーと肉じゃがを作った。と



- れたてのジャガイモは、やわらかくてホクホクしておいしかった。全園児に食べてもらった。他の年齢児から「もっと作って」という声が出てみんな満足していた。

- クッキングをしたことで、調理への興味が湧いてきて家庭でも包丁を使ってのお手伝いをする子も出てきた。家庭へ食育の啓蒙ができた。

(2) カブトムシの飼育

- 地域の方からカブトムシの幼虫を取りにおいでと声がかかり、年中児と年長児が、自宅の庭の堆肥の中から、幼虫を探して飼育ケースの中へ入れた。「そっとなれないと死んじゃうよ」「わあ！でかい」など先を争うよう見つけていた。7月になると、一人一人が飼育ケースの中で飼育観察をおこなった。「僕の幼虫、カブトムシになっているよ」「カブトムシ喧嘩しているよ」「ゼリーたべてるよ」と毎日飼育ケースの中を



のぞきこんでいた。幼虫からさなぎ、成虫へと日々成長していく姿を実際に見て子どもたちは興味が深まっていった。また、死の悲しみがあり、お墓を作って、「今度もまた会おうね」と手を合わせる子もいた。自分たちで育てたカブトムシを、家庭に持ち帰り家族と一緒に飼育観察してもらい、家での様子も時々話してくれた。

(3) 老人との交流

○ 保育園に地域の老人クラブの方に来園してもらい、一緒にグランドゴルフをしたり、お年寄りの方が演じる手品を見たり、会食をしたりして交流を図った。

・グランドゴルフは、お年寄りと初めて触れ合う年少児も、恥ずかしがることもなく、手をとって教えていただき、お年寄りの優しさ、ぬくもりを肌で感じていた。また、老人会の方が演じる手品は、ハラハラドキドキしながらも楽しく見入っていた。給食も一緒に食べることで「おいしいね」「そんなに食べれるの?」「何でも食べれるよ」などの会話も弾み、喜んで交流を楽しんだ。

・夏まつり、七夕祭り、敬老会、運動会では一緒に「盆踊り」「歌」「肩たたき」や「手あそび」をしたり、遊戯を発表したりして楽しんだ。お年寄りの方が目を細くして喜んでくださり、子どもたちは優しさや、愛情を十分感じ取っていた。



(4) その他

○ 「命」をテーマにした人形劇「きつねのおきゃくさま」を鑑賞した。小さい子は「命」ということはあまり理解できなかったが、年長、年中児はハラハラドキドキしながら友だちのためにオオカミと戦うきつねを応援し、じっと真剣に見入っていた。最後に死んでしまったきつねに涙する子もいた。



○ 聴診器を使用して友達同士、心臓の音を聴いた。最初のうちは「聴こえない」といっていたが、当てる場所を知らせてやると「わあ~! ドクンドクンいってる」「すごい音がしてるよ!」とびっくりしていた。また、心臓から聴診器を離してみると「死んでる」という声も聞かれ、不思議がっていた。その後、病院ごっこで遊ぶ子もいた。

3 おわりに

○ 栽培活動を通して植物が育つ変化や過程に感動し、生き物の成長には水と光が必要であることを知ったようだ。それとともに、他の生き物の命を頂いて自分たちは「生きている」という感謝の気持ちも育ってきた。

○ カブトムシの飼育を通して幼虫からカブトムシになる生態の不思議さ、触り方、飼育の難しさ、命の力強さ、死の悲しみなどを体験することにより、「命」とは何かを子どもたちと一緒に考え、共感し、学んでいくことができた。

○ 地域や老人の方々との交流を持つことによって、顔見知りになり、親しみを持って交流することができた。老人の方々はお年寄りのすることを無条件で受け入れてくださるので、人の優しさ温かさを体験でき、子どもたちも自然に相手に優しくしようとする気持ちがでてきた。